

7

電子出版

電子情報技術は、20世紀後半において出版物の製作に大きな変化をもたらした。それまで出版物は人手により金属活字を1本ずつ拾い集め並べることで組版されていたが、コンピュータが導入されたことにより短時間で多量のページ組版が可能になった。さらに20世紀末におけるデジタル技術の進歩とインターネットの登場は、文字情報の流通において、歴史的に重要な役割を担ってきた出版活動に多大な影響を与えている。

文字や画像を印刷物として情報交換するには、物流に依存することになる。このため情報流通量は時間と距離により制限されてきた。しかし、インターネットの普及した今日では、デジタル化された出版情報は瞬時に世界中に配信され、複製と流通頒布にかかる経費は印刷メディアと比較して大幅にコストダウンする。いうまでもなく出版活動において、もっとも重要であり、労力と経費がかかるのは、信頼され、価値ある作品を生み出すことである。電子メディアを利用して、複製と流通コストが低減したとしても、コンテンツの生成コストは変わらない。

このような電子メディアの影響と可能性については、出版界も早くから注目し研究してきた。書協では、1981年(昭和56)9月に、いち早くニューメディアが出版物に与える影響を研究する目的で「新媒体研究会」を発足させた。さらに88年に「電子出版委員会」を新設し、委員会活動を通じて電子出版の動向調査や最新情報の共有、さらに標準化提言などを行ってきた。

電子出版の概要を整理したうえで、メディアの発達に沿って電子出版の変遷をみていくこととする¹。

❖ 出版の電子化

電子出版を広義にとらえると、インフラの電子化とコンテンツの電子化の二つに分けることができる。前者は最終的に発売されるのは従来どおりの紙の本ではあるものの、その製作や流通などの基盤技術が変化したことにある。これはさらに、本の製作技術の変化と流通販売の変化に分けることができる。製作技術の変化には、従

来、印刷会社が行っていた組版を出版社内で行うなど編集製作の作業工程の変化も含まれる。また本の受発注システムも電子化されている。

後者は本そのものが電子化したことである。コンテンツの電子化では、印刷出版物から電子メディアに移行したことで、「コンテンツメディア」と「表示装置」に分離したことになる。このコンテンツの電子化は、いま、まさに起こっている変化であり、編集者の技術、出版社の組織、出版産業構造、取引などの商慣習、流通販売などの各分野で対応が迫られている。

IT (information technology) がもたらした出版の変化は、次の4点に整理できる。

① 本の製作技術の変化(1970年代以降)

鉛活字による組版と活版印刷は電算写植システム(CTS²)に劇的に変化し、パーソナルコンピュータと専用組版ソフトによるDTP³へ移行した。さらに1990年代後半になって、プリントオンデマンド(POD)によるオンデマンド出版が本格化した。

② コンテンツメディアの変化(1980年代半ば以降)

CD-ROMなどの電子メディアが新たな媒体として登場した。本のコンテンツ(内容)がデジタルデータ化したことで、インターネットの普及以降、デジタルデータだけをネットワークで流通させるオンライン出版が実現した。

③ 表示装置(ビューワー)の変化(1980年代半ば以降)

本をCD-ROM化したことでパソコンなどの再生装置が必須となった。当初はCD-ROMドライブが高価であり、パソコンにドライブを外付けして利用していた。その後、富士通FM-TOWNSなどマルチメディアパソコンと称したCD-ROM一体型パソコンが普及し、それにあわせてCD-ROMメディアも普及することになった。さらに8センチCD-ROMを利用した「データディスクマン」(ソニー)やPDA、電子辞書「リブリエ」や「Σブック」など電子書籍専用端末の開発が続いている。また、2000年代になって携帯電話を利用した読書が目されている。

④ 流通販売の変化(1990年代半ば以降)

ネットワークによる電子商取引(eコマース)の成功例として、アマゾン・コムなどのオンライン書店があげられる。インターネットの普及以前からも出版社、取次、書店間で受発注にネットワークが使われていた。なお、オンライン書店は、狭義には電子出版には分類しないのが通例である。

1—— 参考文献:植村八潮「出版の電子化と電子出版」『出版メディア入門』(2006) 日本評論社

2—— computer (ized) typesetting systemの略。

3—— desk top publishingの略。DTPという言葉は、1986年にAldus PageMakerを発売したアメリカのアルドス社が提唱した。



1990年にソニーが発売した「データディスクマンDD-1」。8センチCD-ROM専用プレーヤー1号機である。

❖電子出版の定義

一方、電子出版を狭義に定義すると、「文字・画像情報をデジタルデータに編集加工して、CD-ROMなどの電子メディアやネットワークにより配布する活動」となる。

日本で電子出版が注目された1980年代はDTPによる電子編集製作やフロッピーディスク、CD-ROMなどの電子メディアによるパッケージ系電子出版が中心であった。90年代後半以降では、本の内容をデータ化したいわゆるデジタルコンテンツをインターネットにより配信する電子出版が主流になっている。このような電子出版をコンテンツ系電子出版とかオンライン出版とよんでいる。

電子書籍は「eブック」とよばれることもあり、一般にはネットワークにより配信されている小説やエッセイなどの文芸書、マンガ、写真集などの電子出版物(デジタルコンテンツ)を指すことが多い。パソコンで電子書籍を読むためのソフトウェアをビューワー、電子書籍専用の読書装置を電子書籍専用端末とよぶのが一般的であるが、ときには装置そのものを「eブック」とよぶこともある。専用装置としては電子辞書がある。

また、書籍をデジタル化したデータベースから、読者の要望によりオンデマンド印刷して販売するオンデマンド出版も電子編集製作の概念に含むことができる。

A | 電子出版の流れ

A-1 誕生と発展

❖出版界における電子出版ブーム

出版物の電子化は1960年代にアメリカにおいて学術情報分野で始まった。このころ